



## アンカラ大学

切山 薫子  
文教育学部人文科学科



## トルコでの学生生活

学業としては、トルコ語を一から学ぶためにアンカラ大学付属の語学学校に通い、6カ月間ほど平日9時から1時まで勉強しました。生徒の国籍はシリアなど中東が多いものの、欧米からのビジネスマンもおり、時折教室で宗教や政治の話が白熱するなど刺激的でした。大学では後期から歴史の授業を受講していましたが、未熟なりスニング力では教員がひたすら話し続ける形式の授業を十分に理解することはできませんでした。ただ、そこでのクラスメイトとの出会いは、私の留学に大きな影響を与えました。授業外の時間は、初めのうちはトルコ人の友人もつくれず寮にこもっていましたが、寮の居心地があまりよくなかったこともあり、片言のトルコ語で頻りに国内を旅行するようになりました。さまざまな地で多くの人と出会ったことで、悪い面も含めてトルコという国をより深く知ることができたと思います。後期に入りコミュニケーションにも自信がついてからは、友人の寮や家に泊まりに行くなど、積極的に様々なトルコ人の生活や考え方を知ることに努めました

## トルコで学んだこと

トルコに留学して常識のむろさを知りました。日本では当然のことがトルコではそうではなく、その逆もまた多くありました。例えば日本では何事も期日を守って計画的に行うことが良しとされますが、トルコでは新学期が始まって1~2週間は先生が大学に来ないため休講になったり、寮の改装工事が寮生に何の連絡もなく始まって急きょ移動を余儀なくされたり、かなりルーズで振り回されることも度々でした。またトルコでは見知らぬ人や知り合って間もない人にも親しげに接することが多く、私は相手の真意をはかろうと緊張の連続でした。中でも最も戸惑ったのは宗教に関する事でした。国民のほとんどがイスラム教徒だとはいえ、一般的にトルコは他のイスラム国に比べてかなり西欧化が進んでいて、飲酒がごく普通に行われ、スカーフを被らない女性が多くいるなどあまり宗教を感じさせません。

ですが、たまたま授業で知り合った学生たちがかなり敬虔なイスラム教徒であったために、なりゆきで一緒にトルコ国内の聖地に行ったり、彼女たちの寮や家に泊まったりすることで、期せずしてイスラムに深く触れることになりました。手助けしてもらったときにお礼を言えば「あなたを助ければアッラーが私を愛して天国に行けるの」などと真剣に言われたり、みんなで楽しそうに踊っている曲の歌詞が「アッラーを愛しています」というものだったり、たじろいんだり苦笑することも多々ありました。イスラムの相互扶助の精神にのっとり、彼女たちはトルコで会った他の誰よりも私を気遣い、助けてくれましたし、悪口や嘘は「教えに背く」と忌避するような真面目さは友人として信頼できました。

互いに理解し合えたといえは嘘になります。私はどれほどイスラム教の素晴らしさを説かれてもイスラム教徒になる気はなく、どこかで彼女たちを冷めた目で見ながらその生活を観察していました。おそらくそれは、薄々彼女たちも感じていたと思います。私も神道や仏教など入り混じった日本文化と自らのアイデンティティを少しでも理解してもらえるよう折に触れて説明したつもりですが、それでも自らの宗教を絶対的に正しいと信じる彼女たちにしてみれば、他宗教の考えは「間違い」としか思えないようで、興味は持ってくれても認めてくれることはないと感じました。お互いを理解し認め合う、ということは本当に難しいと今回の留学で痛感しました。文化と文化、個人と個人が接する中で、互いにどうしても受け入れられない部分は出てくるのだと思います。それは今回の私の留学の中ではトルコ人の時間や規則に対するルーズさであり、宗教に対する見解の相違でした。外国人というマイノリティの立場では社会に溶け込むためにより譲歩せざるをえませんが、無理せず互いに受け入れられる部分から関係を深めることが大切だと感じました